

# 「日本及日本人」明治大正半百年記念号（上）

（大正6年9月発行 明治維新後50年記念第714号）

## 目 次

口絵(三色版) (略)

西洋名画 『戦時』ワーレン・ドウ筆

写真(略) 明治天皇御野点 岩倉大使および副使

岩倉大使随行員 乃木東郷亮大将の会見

題言 維新後半世紀の急進展

維新後半世紀の生死録 三宅雪嶺

人物の評価—稗史(伝承)と正史—小栗上野介—近藤勇と土方歳三—中島三郎助—萱野権兵衛—雲井竜雄—横井小楠—大村益次郎—広沢兵助—小原鉄心—江藤新平—島義勇—前原一誠—西郷隆盛—薩派の二分—士族兵と士族兵との戦争—迂闊な男—将に将たる者—桐野利秋—篠原国幹—村田新八—逸見十郎—木戸孝允—大久保利通—事実上の首相—川路利良—野津鎮雄—岩倉具視—三条実美—三島通庸—森有礼—山田顕義—井上毅—後藤象二郎—山地元治—川上操六—勝海舟—榎本武揚—山岡鉄舟—大木喬任—黒田清隆—星亨—福沢諭吉—中江兆民—新島襄—西郷従道—西村茂樹—田村怡与造—片岡健吉—近衛篤磨—高橋健三・神鞭知常・陸実—鳥尾小弥太—田口卯吉—福地源一郎—児玉源太郎—野津道貫—伊藤博文—井上勝—谷干城—小村寿太郎—林董—乃木希典—田中正造—桂太郎—徳川慶喜—伊東祐亨—松田正久—井上馨—大山巖・高島鞆之助—古賀謹一郎—加藤弘之—外山正一—奥田義人—鶴原定吉—山県有朋対大隈重信—多くの著名な人物—個性の発現

(以下の項は別途掲載)

半世紀の回顧

維新創業時代 大木遠吉

明治天皇の周囲の人 杉浦重剛

人物回顧一夕話 寺尾 亨

副島先生と勝海舟 頭山 満

かく明治半世紀を見る 尾崎行雄

半世紀間の政勢概観 島田三郎

大正趣味論 西村駿次

外交舞台の五十年 大場柯公

新政府に対する幕人の思慮 島田三郎

外夷肉食の醜風 江原素六

東京の寂しさ 山中 笑

瓦解後の屋敷町 山下重民

漢学書生 亀田 英

魚河岸の佐幕軍 青木泰介

黙阿弥の時世劇 河竹繁俊

士族の商法 斎藤宗一郎

撃剣会 樋口新六

浅草の菜飯茶屋 島田一郎

仏蘭西思想 笹川臨風

人力車と牛鍋 林 若樹

都甲勲の横死 石橋絢彦

千坪二十五円 玉虫教七

代謝期の平穩 仁杉 英

田安の市内取締り 矢島隆教

東京奠都は遷都なり 同邱老貉

えじゃないかえじゃないか 鳶 魚

亀之助殿お立ち 伊丹鉄弥

歴史小説 怪傑岩倉入道 (50年前の京都を背景にして)

中川四明

付録(略) 維新後 50 年を絵にして 錦絵 64 頁

裏絵(略) 明治初年の武士 大野静方 筆

本号に限り定価金 75 銭 小包送料内地 8 銭

(目次おわり)

## 維新後半世紀の急進展

この半世紀の間に我が日本が長足の進歩を遂げたことは、自画自賛の誇張ではない。事實は明白である。その初年と終りの年を比べれば、これを認めざるを得ないだろう。大使岩倉と副使大久保、木戸、伊藤らが欧米を巡回した時、他国からは多少の好奇心を持って迎えられたに過ぎなかったが、後に小村大使がアメリカでロシア大使と折衝し、また首相の伊藤がハルピンでロシアの大蔵大臣と会見し狙撃されたことは、いずれも世界の注目を集めた。かれらが 50 年前の人物に比べて優れた人物でもないのに、世界における評価が大いに異なるのは、国運が進展し、日本が少なくとも太平洋上において一強国になったからに他ならない。

ロシア皇太子の遭難は、この半世紀の中間の出来事だが、当時の日本政府のあわて方はただものではなかった。威厳ある皇太子の随員を間に挟んで、互いに対等国であることを忘れる有様であった。世間にも我が国が危急存亡に直面したような悲鳴が上がった。この時は実に我が国力の不足を感じた。当時のロシア艦隊乗組員の行動は、新聞にこそ記載を禁じられたが、痛憤するものがあった。陛下の慰問があった以上、皇太子は東京訪問があつて当然と思われたが、それが実現しなかったのは、ロシアのためにも惜しまれたが、結局は両国の不対等の関係がもたらしたものといえよう。

数年ののち支那と開戦する時、その危険を憂慮する者があつた。しかし日本の連戦連勝に苦笑を禁じ得なかった。勝利後、ロシア、ドイツ、フランスの三国干渉があつたが、これをどうすることも出来ず、勧告どおりに新領土を還付した。十年後なら、同じ失敗でもこんな拙劣な結果にはならなかつたであろう。今の外交官の能力が上がつたからではなく、外交その他の機関が整備されたことによる。もとより整備を十分しないで怠慢な機関が多いから、今後干渉の類が起きた時には、よほど複雑で辛辣な秘術が必要とならう。

世界の変化は急を告げており、日本が新政府の下に世界に現われたとき、イタリア半島はすでに統一して王国となり、次いでプロシアが連邦を統合してドイツ帝国となり、イギリスが女王をインド女皇とし、国家の興隆は盛んであつた。しかし一方ではフランスがドイツにやぶれて 2 州を割譲し、スペインがアメリカと戦い海外の領土を失うなどは、世界の大変化の予兆であつた。オーストリアの皇太子夫妻が、セルビアで遭難してから関係ある諸国はことごとく戦乱の渦中に追い込まれた。現在の大戦は 50 年前には夢想もしなかつた大きな規模である。

戦乱の規模が比較できないほど大きくなつたのは、人口の増加ではなく、物質的文明の顕著な進歩が原因である。フランスがこの 50 年間人口に変動がなく、そして近年の敗北にもかかわらずドイツの大軍を食い止め、徐々にこれを排斥しているのは、挙国一致して国難に対処しているのと、科学工芸の進歩において他に優れているからである。敵の 42 柵に対し 52 柵を作り、敵の毒ガスに対し火液を作つたのは技術の進歩の結果である。一人で敵の飛行機 50 余機を破壊したことは工芸に伴う技術の進歩による。進歩はまことに迅速を極めている。

50 年前、電燈なく、電話なく、無線電信もなかつた。無線電話などあるはずがなかつた。今はいたるところに活動写真、いたるところに蓄音機がある。これらは一部の専門家を除き、夢にも想像できなかつた。今後さらに 50 年経てば、空中を自由に往来できるようになり、顧みて今日の不自由を思うことであろう。現在は加速度のついた進歩の最中にあるのだ。科学工芸に対し、哲学文芸の進歩の遅さは、建物を 10 階、20、30 階にしなげら、人間の高さは変らないのに似ている。しかし物質的大変動は、思想に影響しない筈がない。白雲は飛び、黒雲も飛ぶ。

近い過去の進展は急

将来の進展はさらに急

## 維新後半世紀の生死録

明治維新より半世紀、我が日本歴史に前例のない国運の進展があった。幾多の人材が輩出し、内外の大勢とともに波乱を起こしたが、その

### 人物の評価

は、主として生死の遅速によって決まる。相当の寿命を保持して、行うべきことを行って終われば真価に近い評価を得る。短命で行うべきことを行わなかったか、長命で行うべきことを行い、さらに行い得なかったことを行ったか。絶頂に達せず、あるいは絶頂を過ぎれば真価と評価の間に大きな距離を生ずる。伸ばせる能力がありながら、その一片をも示さずに死ねば、大天才も凡才とあなどられ、永遠に真価を認められない。これに反し、すでに天才の徴候を示し、将来を期待されながら若くして死ねば、大いに惜しまれ、寿命があればさらに活躍したであろうに、と言われる。これは未知数であり、決して断言できないことではあるが、おおむね真価以上に称賛される。そしてしばしば、ほぼなすべきことをなし、評価の定まった後、世の希望に沿わないことがあれば、前の評価は消え、さらにまったく価値がないとみなされる場合もある。世間の評価は信ずるに足りない。時には金石が浮き木竹が沈むこともある。およそ頭角を表わすものは、少数の識者に知られる場合であれ、多数の愚者に知られる場合であれ、普通の評価は識者、愚者の混在するところで決まる。物語上の人物である白波五人男や里見八犬士などは、歴史上の六勇八将より知られているが、正史上の人物は広く世間に知られず識者の識別によるほかないので、

### 稗史（はいし）と正史

は明確な区別がない。正史上の人物であっても、稗史上の人物に評価が劣る場合も少なくない。現在の人物の評価が動揺するのと同じく、過去の人物の評価も変動する。ただある時代において世間の通り相場というものがあるだけである。評価が真価とまったく異なるとはいえないが、評価が真価に等しいかと思うと大いに誤まる。評価は僅かな事件で九天の上に昇り、僅かな事件で九地の下に落ちる。あるいは賛否入り乱れて上下を繰り返す。早く死んでも幸いな場合、不幸な場合があり、遅く死んでも幸いな場合、不幸な場合がある。正史上著名な者でも長命によって評価が下がる場合があり、正史上悪名高くても短命により大いに評価される場合もある。死すべき時に死ななければ死に勝る屈辱を得るが、死すべき時を明白に知ることはできない。功なり名を遂げて死するのは最上であるが、それを理由に死を求めるのは、功名に捕らわれた小器

であることの証拠となる。自殺の機会があったとして、その時いかに身を処するか。長命で恥が多いのを恐れて、ことさら長命を捨てるのは、毀誉褒貶の奴隷に過ぎない。さりとして長命で恥多い者が存在することも否定できない。

単に評価の点で言えば、盛名の絶頂期に死ぬのが理想的である。歴史上の人物で絶頂期前に死んだ者が、もしその後で死んだ場合、また絶頂期後に死んだ者が、もしその前に死んだ場合、評価は変わるであろう。評価が変わるだけでなく歴史自体が多変の変化を受けるであろう。史伝に記載される事柄はすでに表れた事柄に限られる。しかしそれは各自の固有の力の表われではない。固有の力を判定すれば、従来の史伝が転倒する場合も少なくない。大才を持ちながらそれを伸ばさずに死んだ者がある一方、久しく功績を認められず、偶然のことで天下に認められた例もある。過去 50 年間寿命の長短により評価を変えなければならぬ者は数えきれないほど多い。

有為の人物で明治に入って真っ先に死んだのは

### 小栗上野介

である。小栗が破れて勝海舟が勝ったことは、明らかに旧幕と維新とを画(かく)した出来事であった。才幹においては小栗が優れ、当時彼に匹敵する人物はいなかった。外交の衝、財政の術、陸軍の衝、海軍の衝に当り、着々と政務を処理した。幾多の困難にも迷わず、幕府の下で国乱を平定し、世界に乗り出そうとした気概は、双肩に国家を負担する彼の決意が見られた。弁に長じ八方に応酬できた点は、今の大隈にもよく似ている。方針を定め、百難を排して進む点では彼に勝る者はいない。年若く、精力に富み、もし時を得たならば、諸豪をも目を見張らせたであろうに、官軍の将に召され、道中で殺されてしまった。勝海舟が西郷隆盛と並び称されているが、小栗は勝を用い、支配した者である。絡み合った縄を切り開く才能は、勝の上であった。その小栗が勝の盛名におおわれ、あるかないかのように扱われているのはなぜか。それは小栗がだまし討ちに会ったからだ。命さえ全うしておれば大いに飛躍出来た人物だけに、そうはならなかった。彼は才能において一世に抜きん出ていたが、その才は天下の大勢に反抗する事が出来なかった。棟梁の才であって、大建築の崩壊を防ぐことはできなかった。小栗はどこまでも大勢に逆らおうとし、勝はどこまでも大勢に従おうとしたのである。小栗は幕臣として幕府を維持し、薩長を粉碎しようとし、勝は政治を朝廷に統一し、薩長を運動の中心にしようとした。時が来て季節が巡るように、幕府は老衰し、もはや救済の道はないのに、小栗は意地強く、困難をものともせず、有り余る才能を持って立ち向かっていった。彼が意気と胆力と才識を発揮すれば、幕府を維持できると思いついたのは、理由がある。勝はこのような才能がない代わり、大勢を察してこれに従うのに長じ、不可能事をあえてするのは愚の骨頂と考える。小栗がもし殺されず明治政府に用いられたとしても、勝のように薩長と手を握ることはできず、早々に官職を投げたであろう。もし曲げて才を伸ばせば、大隈以上の活躍をしたかもしれない。大隈は初め

伊藤の上に立った。小栗は大隈の上に立って、西郷も大久保も小栗の言うことを聞かねばならなかったであろう。大才が大勢に逆らうのは、小才が大勢に従うのに及ばない。小栗は維新の三傑を相手に余裕綽々の才能を持ちながら埋没し、僅かに横須賀鎮守府に遺跡をとどめるに終わった。

小栗と趣は異なるが、同じく幕臣ながら死んだ者に、

### 近藤勇と土方歳三

がいる。幕臣と言っても多摩郡石田村の人、三多摩の壮士の雄である。二人の体格および性質は異なるが、等しく豪勇をもって聞こえ、勤王志士に煙たがられた存在であった。一軍を率いる将としてどれだけの才能があったか、それを示す機会はなかった。ただ作戦計画よりも闘将として奮戦するのに長じていた。近藤は撃剣に詳しくなかったにもかかわらず、戦えば必ず勝ったのは、桐野利秋と型が同じである。近藤は司令官には不向きであったといわれるが、桐野が薩軍を統率したのを見れば、一概に断定はできない。思慮については土方の方が優った。近藤が官軍に招かれたとき、土方は「欺かれるな」と止めた。また土方は後に各地に転戦し、五稜郭で榎本らが闘志のないのを見て、「近藤とともにここまで死なずに来たのは、主君の恨みをそそぐ一心であった。」とあって戦死した。同僚諸将の声色に惑わされず、一人粗食に甘んずるなど、単に闘将として誉めるばかりでなく、実に名将の面影があった。歳三が死んだのは明治2年5月11日。

同15日二人の子永保、永固とともに

### 中島三郎助

が戦死した。官軍が榎本らに降伏を勧めたとき、中島は断固として受けず、「諸君は手を引け。私は留まる。」と言い、刀を抜いて敵陣に躍り込み倒れたのである。榎本らが五稜郭に立て籠もったのは、幕末を壮絶な色で覆ったが、降伏によって、無意義なものとなった。ただ土方が死に、中島父子の戦死には多少の意義があった。

同18日会津藩の家老

### 萱野権兵衛

は朝廷より死を賜わり、静かに自刃した。会津藩が若松城を固守し、四面に敵を受けたのは、果たして正しかったかどうか。議論は分かれるが、城を守って戦うと決めた以上、これを枕に戦わざるを得ない。大勢が死に女性の死者も出る中で、城門を開いて降伏するのは武士の面目が立たなかった。白虎隊の名誉は守らなければならない。家老の萱野が全責任を引受けて、死ななければ、会津は腰抜け武士の標本になってしまったであろう。もし彼があらかじめ死を決していなく、官命によりやむを得ず死んだとなれば、何をか云わんや。会津人が後に薩長人の下に官禄を食んだ状態は、維新

前を顧みて気恥ずかしいが、菅野の身代わりを感謝し、薩長に遠慮しながらも運を開き、会津男児の骨のあるところを見せてほしい。

明治3年12月

### 雲井竜雄

が小塚原で死刑に処せられた。雲井は若松城が官軍に囲まれたとき、兵を發して援護に向おうとした。しかし一先ず米沢に帰った時、藩主はすでに降伏しており、どうすることも出来なかった。しばらく潜んで再挙を図り、同志を集めていたところを官軍に疑われ捕えられた。27歳の死であった。彼が安井息軒の門下にいたとき、同塾の仲間は彼を重んぜず、谷干城なども彼を軽んじていた。容貌が悪くて、議論にも控えめであった。しかし決して塾生が思うほど軽い人物ではなく、屈せずたゆまず、謀略に次ぐ謀略を編み出し、薩長に反抗した。普通の人物が出来ることではない。親友であった人見寧はのち知事となって終わったが、彼も知事ぐらいにはなれたであろう。生きていれば明治23年には47歳。衆議院議員として活躍したのではなかろうか。かつて集議院に出席して失望したので、衆議院にも失望するかもしれないが、新聞、あるいは政党活動に従事し、絶えず何かの波乱を起こしたことであろう。封建制の回復を念じ、情に馳せ、理に疎(うと)く、時事を誤解するところはあるが、彼の詩は明治の青年がよく高吟したものである。大言壮語し、悲憤慷慨しながら、漢学書生がいたずらに言葉を飾るのと違い、少しも嫌味がない。彼の詩『悪詩頻上書生口』には確かに詩才があり、もし彼が詩想を言い表すのに適当な言葉を得れば、一大詩人になったかもしれない。漢詩は次第に世間から遠ざかり、さりとして他に適当な詩形もない。彼は胸中詩想にあふれつつ、ついに国民詩人にはなり得なかった。一青年であった竜雄の将来はまったく不明であったが、彼の詩は明治初年の動揺時における代表的作品と見てよい。

明治政府の関係者で最初に非業の死を遂げたのは

### 横井小楠

である。明治2年正月15日刺客の手に倒れた。横井は優れた見識をもって政府の参与に推された。時流に超越した見識により同僚から先輩として敬された。しかし時すでに61歳、禍に会わなくても明治政府の新計画にどれだけ貢献できたか疑わしい。尊王攘夷か、佐幕開港か、また公武合体か、人々が去就に迷う時に大勢を達観し、これに順応する道を世に示したが、事すでに定まった後は彼の見識も無用となった。老先生として敬意は払われたが、彼に求めるものはなかった。彼が禍に会わなかったとしても、長く官職にとどまったかどうか不明である。少壮者流の暴論に快からず辞職したかもしれない。外国の文献を読み、また外国を視察してきた者が増えてくると、横井にとっては新知識と議論を交わして負けるより、随一の見識家として終わる方が幸いであったかもしれない。

実際に即した見識家としては、同年9月4日に刺殺された

## 大村益次郎

が優れていた。彼はすでに政務の緒に就き、人材を登用する仕事に従事していた。薩藩には薩藩の順序があり、長藩には長藩のそれがあった。その順序を踏まなければ妙案奇策も実行できない。もし強藩の人材を抜く新知識を得れば、長藩出身の彼の立案は直ちに実行できる。薩藩は他藩人の知識を吸収したが、長藩は自藩に相当な人物がいるとし、他に依存しなかった。大村は自ら蘭書を読み、海外の事情に通じていた。かねて腹案を持っており、彼の頭脳にこそ新政府の建設、および将来の展開が期待されていた。46歳で死んだのは早すぎた。さらに20年生きていたら、人の想像以上のことをなしとげたであろう。征韓論はどうなったか。西南の役はどうなったか。必ず今のようにはならなかったであろう。廃藩置県に続いて、鹿児島県の特別扱いを撤廃し、西南の役も起さず、もし起こったとしても大村が征討の主になり、軍事と政治の間にまたがって大久保を事実上の首相としたであろう。そして政治の方針も異なったものになったであろう。大村は十分に能力を伸ばさず、真価を発揮しないまま終わった。大村は長州の出身であるが、常に長州のために尽力したのではない。江戸で蘭学を教え、幕軍が郷里に迫るのを聞き、脱走して難に当り、以後新知識を活用して重用された。

## 広沢兵助

はその長州にあって、早くから重要な職についていた人物である。長州の勢力発展に力があり、木戸と共の長州の元老であった。刺客の手に倒れたのは39歳の時、禍に会わなければ大功があったに相違ない。木戸は神経衰弱になり大久保と対抗できなくなったが、広沢は事に臨(のぞ)んで木戸のように悩まず、難局に瀕しても平然としていたので、同僚から大いに信頼を得ていた。伊藤が大久保に頼り、助けを得たのと違い、大久保は自ら広沢の下に屈した。木戸が衰弱して困難にたえなくなった時、大久保を押さえるのは、大村か広沢しかいなかった。この二人が倒れた後、一時大久保が権力をにぎったのである。明治5年4月

## 小原鉄心

が没したのは、多少注意を要する。元治元年長藩の福原越後らが、京都を騒がせていた時、鉄心および子の迪(てき)らが率(ひき)いた大垣の兵がこれを討ち退けた。大垣にその人ありと聞こえた鉄心は、この事件により声望がさらに大きく上った。諸藩の志士に重んじられ、木戸らと同格の地位にいた。しかし伏見の変で鉄心は官軍側につき、態度を疑われて声望は一時に落ちた。親子も分れたがその理由はよく分らない。もし鉄心が大垣に兵を率い薩長とともに行動したなら、明治政府の元老となり、子の迪は子爵か伯爵を授けられたであろう。伏見で失敗した後は、大いにつとめたが政界で



は活躍できず、次第に忘れられていった。56歳で死んだのは惜しまれるが、伏見の変の前に死んでおれば藩主も処置を誤らず、いまさら鉄心あればと想望されたことであろう。大垣に鉄心あることは、土佐に竜馬が有るように思われたであろうに、僅かの事件で栄枯盛衰にかかわることが知られる。

明治7年の佐賀の乱に、佐賀三平の一人である

## 江藤新平

をはじめ、多くの有為の人物を失った。雲井竜雄は打首の刑処せられたが、明治政府の要路に携わる者をさらし首に処したのは、明治史の一大汚点である。雲井、江藤の二人とも肺病であったから、早晚病気で死んだかもしれないが、江藤が40歳で処刑されたのはいかにも惜しい。彼は大久保に抵抗し続け、面前で責を問うことがたびたびあった。もし刑を免れれば、必ず何事かをなすとげたに違いない。あるいは特別の手段により、大久保の位置を覆(くつがえ)したかもしれない。彼は薩長以外にあつて、薩長政府に盲従せず、政府を去っても力を伸ばせる人物であった。同僚の参議は全員伯爵となったが、彼の子孫には何の優遇もなく血統は断絶した。裁判の乱暴なことは驚くべきことであった。彼のさらし首の写真が旧法の実例として伝わるなど、維新の功労者中もつとも不幸な人物であった。

## 島 義勇

は53歳で死罪となった(佐賀の乱の首謀者)。相当な年配だから、将来に多くを望めないが、生き続けて政治上の力を発揮できれば、陽明学の一権威になれたかもしれない。横井小楠も陽明学の権威であったが、島は知行一致を実行して横井を上回っていた。4, 50歳が定命とすれば、山中一郎が27歳、香月経五郎が26歳で島とともに死んだのは惜しまれる。彼らは共にヨーロッパに留学して、帰国後変に加わり斬罪に処せられた。田尻稻次郎、目賀田種太郎と同期の留学生であったが、罪を免れておれば、彼らと同様の地位についていたであろう。当時武富時敏も変に加わったが、年少であったので許され、その後大臣となったのを見ても、刑死者の中には相当の人物があったことは間違いない。変に加わって刑を受けたのち、生き長らえて無為に過ごした者もあるから、変に加わったものすべてが惜しまれるわけではない。しかし幾人かは優れた才能を持ちながら空しく死んだのは明らかだ。佐賀の乱で江藤らがさらし首とされたのは残忍であったが、世間は、力により征韓論を実行しようとしたことで敗れたのは軽率であったとけれども、勇壮果敢に大陸経営に着手しようとした志は諒とした。

明治9年萩の乱が起きた。世間は何の乱かよく理解できず、ただ

## 前原一誠

の無謀な挙であったと記憶する。前原は大村に次ぎ、山県に先んじて兵部太輔となつ

た。どのような事情でその位置に就いたか不明であるが、相応の理解力はあったのであろう。しかし兵を起こす何の理由も見当たらない。思想が硬直していて、適切な理由が発表出来なかったのか、発表しても広く世に知られなかったのか。逮捕の後父母親戚に贈った書面は、人々の涙を誘ったが、結局のところ人にだまされたといい、どのようにだまされたかは言っていない。大の男が2、3の人にだまされ、斬罪に処せられたとは、いかにも不甲斐ない。彼の恨みは木戸、伊藤、井上にあるのだろうか、何を恨んでいたのだろうか。松陰門下の有望な者のこのような不甲斐なさは不可解である。君子が人を欺くならば、欺かれた君子を責めるべきか、欺いた者を君子が責めるべきか。大勲位の栄典がある者も、ひとたびつまづけば一般人と変わるところはないのか。彼の死は43歳、それより長く生きて活躍できたとは思えない。ながく萩に引退して、そのまま朽ち果ててもやむを得なかったと思われる。彼の部下であった奥平健輔は37歳、一誠の弟山田穎太郎は27歳、その弟佐瀬一清は25歳、どれもひとかどの人物であった。兄弟3人が斬に処せられたことは近世多くは聞かれない。多くの人がこの事実を知らないのは、3人の姓がみな違うからであろう。

佐賀の乱にも、萩の乱にも、当事者は

## 西郷隆盛

が賛意を示していたと述べている。どこまで西郷の応援を信じていたのか、定かではないが、西南の役以前に事を起こした者は、一様に西郷に頼っている。西郷がひとたび動けば、天下にこれを防ぐ者はいないと考えられていた。西郷自身もこれを信じたようで、征韓論で敗れて郷里に帰るとき、板垣退助が、「これからは互いに助け合おうではないか。」というのに対し、西郷はこれを謝絶し、「助ける必要はない。反対してもいいよ。」と答えた。征韓論が華やかな当時、土佐と肥前が薩長の転覆を企て、まず薩摩内部で征韓論を強力に起し、長州の勢力を圧伏する。その後転じて武弁一方の薩摩を倒すという計画を立てた。この計画が洩れて西郷の返答となったのか、あるいは他の事情があったか、いずれにしても板垣の発言は薩摩人の不興を買った。薩摩がいかに不興を感じたといっても、このように無下に土佐代表者の申し出を断ることはないだろう。西郷が江藤に応ぜず、前原に応ぜず、私学の連中をもって決起したのは、自らの勢力に自信を持っていたからである。西郷が旗を掲げる決心をしたのは、種々の事情があった。他動的に動いたとしても多少の成功は見込んでいたと思われる。勝ち負けを超越する心があったとしても、熊本城を囲むまでは薩摩兵の力で天下を制圧できると考えていたのではないか。そうでないとしたら、もっと別の行動をとったであろう。私学校の精兵が向かえば、百姓たちの鎮台兵は問題にならないとして、一切の援助を断り、独力で真一文字に突出した。かつて大いに成功した者は、自らの力を過信する。西郷は周到に形勢を判断したであろうが、幕府倒壊が比較的スムーズにいったため、自分の軍隊を動かせば、時の政府を動かすのに困難はないと過信した。しかし旧政

府を倒すより、新政府を倒す方がはるかに困難であった。新政府はあらかじめ薩摩が禍根であることを察し、絶えずこれに備えていたのである。長州人は政治機関を運用するのに長じており、何らかの機会に薩摩に大打撃を与えようと日夜怠ることがなかった。征韓論で

## 薩摩が二分

したのに、長州派は手をうって喜んだ。大久保は長州にとって一つの難物であった。大久保は毅然として動かず、ひとたび決意すると何人も顧みず、政府の中心人物として際立っていた。しかし彼に策を献ずるのは長州であり、長州派は大久保を利用していた観がある。大久保は政府の現在と将来を考え、適所に適材を配置していたから、国家興隆の時に案が成り計が行われて、次第に政治が整備されていった。徴兵令は長州が維新前に奇兵隊を試験し、後に政府がフランス、ドイツの制度にならって制定された。まだ未整備なところはあっても、最良の方法であった。西郷側の薩摩派はこの点の着眼に劣っていた。郷里に帰ってはいよいよ進歩に遅れ、ただ藩兵をもって大事に臨んだのである。しかし西南の役は徴兵が士族兵に勝ったのではない。私学の兵が、百姓兵を一蹴すると考えたのも決して誤りではない。もし当時百姓兵ばかりであれば、薩兵はいたるところで官兵を破り九州を収めたかもしれない。西南の役は

## 士族兵と士族兵の戦争

であった。官軍が士族兵の補充として百姓兵を当てたのは、初期鋼鉄艦が鉄と木を組み合わせたようなものである。砲が微力なら鉄板で装い、その他は木で補う。当時の近衛兵は、諸県の氏族で構成されていたから、いわゆる赤帽は天下の精兵であり、野津鎮雄が旅団長として統率していた。薩兵を倒すのに最も適していた。「赤帽と雨がなければ恐れるものはない。」とは当時よく言ったものである。雨とは薩兵が火縄銃を使用する時点火が出来るかどうかを言ったものである。加えて川路利良の警部、巡査から成る別動隊も士族出身者で固められていた。士族兵を重んじた結果、必然的に抜刀隊が編成され、刀を持って斬りこむ。官軍は国家の財政を後ろ盾に、後操銃を肩にした鎮台兵が士族兵を援護する。ただ私学兵を殲滅(せんめつ)するのに 8 か月を要したのは、政府当局者の技量の乏しさと私学兵の天下に敵なしとする強い信念が、一概に妄想ではなかったことによる。西南の役は薩派を二分し、しかも良い半分を失った。維新当時鳴り渡った薩摩は、ここに実力を失った。後の薩閥と呼ばれるのは看板のみであり、長閥全盛となった。薩派がいかに多くの人材を失ったか、後人は痛惜する。彼らが無事に生きていたなら、天下は薩摩の天下になっていたかもしれない。西郷は 51 歳で没したが、12 月生まれだから新暦で 50 歳、まだ老いたとは言えない年齢である。なお何かが出来たはずである。岩下方平は語っている、「西郷は

## 迂闊な男

であった。自分でもこれを知っていた。『私は戦争にのみ役立つ男、戦争がなければすることがない』といていた。」名代の迂闊漢である岩下が西郷を迂闊な男というのは、苦笑するが、まったくの見当外れとはいえない。西郷は決して木竹漢ではなかったが、知るを知るといい、知らないを知らないとする人物であった。施政の末事は理解しようとはしなかったので、大政治家としては大成しなかった。西南の役に死なず長寿を得たとしても、その後戦乱がなく平穩に過ぎればすることもなく、参議として、大臣として無能を笑われたかもしれない。ただ私学校の長としての存在は、一つの勢力として新局面を開いたかもしれない。もし大久保と和解できれば、征韓ののち私学校を率いて朝鮮を経営するという結果になったかもしれない。あるいは朝鮮半島を占領するために支那と事を構え、ロシアと事を構えて、全国民の敵愾(がい)心に訴え、大陸経営の素地を作ったかもしれない。西郷は戦時に飛躍するが、戦略戦術には得意でないと自認していた。板垣と征韓を計画した時、板垣が反対すると「そうだ、兵のことは君の方が私より優れている。」とおもむろに答えた。西郷は一方面の将ではなく、

## 将に将たる者

であり戦略戦術は問うところではない。総司令官として後の大山巖が「国家が危急を告げる際、至誠至情をもって難局に当たり、国民の多数が信頼できる独特の長所を發揮せよ。」といったが、西郷の気持もまったくそのとおりであった。長命してそれが出来たかどうかは保証の限りではないが、多少はこの程度のことはあったであろうと想像する。すでに兵を立ち上げた以上、政府はこれを許すわけにはいかない。兵によって鎮めるほか方法はない。しかし維新の戦乱からほど遠くもなく、各県より募集した巡査を先に送り出すほどの対応を迫られた政府は、賊徒に対して降伏を勧め、降伏すれば有力者を流罪に処し幾年か後に特赦するという方法を取るべきであった。鳥尾の「西郷を捕虜にせよ」との主張は、実現するはずがないとしても面白い意見であった。江藤、前原らも特別に取り扱いがあっても良かった。西郷に対しては、イタリア政府がガリバルジーを処置したと同じ対応をするべきであった。後に弟の従道を侯爵にするくらいなら、何らかの特別扱いをしてもよかった。政府はあくまで仮借なく攻めて、悲惨な最期を遂げさせながら、父の勲功をもって嗣子(実弟)を侯爵にするなど、理路が明らかではない。しかし降伏を勧めても、私学校の連中が受けるはずがなく、西郷としては城山を死に場所と決めていたのであろう。無謀、無策といえ言え。のちにアジア大陸に飛躍するよりも、健児たちと枕を並べた方が、明治の歴史を飾るにふさわしい。西郷は生きても死んでもよいが、幾多の健児の中には有為な逸材が空しく死んだであろう。私学校の連中の中には、「我らはもとより死んでも良いが、西郷先生を空しく死なせるのは、国家の損失である。特別な取り計らいがあっても良いではないか。」という意見もあった。軍使の往復が数回あったが、要領を得ないまま官軍の総攻撃となった。

徹頭徹尾降伏に反対し、最後まで奮戦して銃弾に当たって死んだのは

## 桐野利秋

であった。彼が西南の役の第一の首謀者であった。彼は開戦より終結まで最大限に奮闘し、勝利の暁には、政府を改造して大陸に飛躍する志を抱き、失敗に終われば賊名を負い戦場に倒れる決意であった。西郷の偉業は勝海舟との江戸開放策の談判成功であり、西南の役ではない。しかし西南の役を明治の一大歴史とすれば、桐野の存在が大きかった。彼は天性の軍人であり、もしヨーロッパの軍事技術を学んでいたら、他に比較する人物がいなかっただろう。無学文盲でありながら相当に理解力もあったから、才能は非凡であった。その上豪快な意気を持ち、伝説的豪傑の感があった。40歳で死を迎えたが、寿があれば計り知れない到達点があったであろう。大いに自信を持ち、あまり学ぼうとしなかったのも、一猛将にとどまったように見えるけれども、のちの技師的将官に似ず、山地元治に似て一層豪快、軍人精神の粹を表わしたのである。彼のように事を起し、事を行い、事を終る。これまた男子の本懐である。

## 篠原国幹（くにもと）

は 42 歳で死んだ。桐野と同格であったが、それほど力を伸ばさずに戦死したのは気の毒であった。しかし桐野ほどの快男児ではなく、人心を魅了するところは少なかった。

## 村田新八

は軍事上の能力は未知数であったが、篠原と同年代であった。乃木將軍を思わせる。彼の長所は軍事よりも政治にあり、順当に官歴を経れば首相の地位に就いたかもしれない。永山弥一郎 40、池上四郎 36、貴島清 35、別府晋介 31、その他壮年の死者は数えることが出来ない。そして戦役を通じて最も能力を発揮したのは、

## 逸見十郎太

であった。小隊長から大隊長になり、後にはほとんど全軍の首脳となった。彼は兵卒が塹壕から頭を出すのを見て、危険だといって抑える一方、自らは敵陣に近づいて動静を伺うこと、まるで郊外を散歩するようなものであった。一旦機を見て突撃を命ずるや、疾風迅雷に退くものを斬り、少しも躊躇しなかった。すでに多少の能力を認められていたが、これほどとは思われていなかった。初め彼を軽んじていた先輩も、後には敬愛するようになった。彼は将の材料を持って生まれ、教養無くして良将となり、教養が身に付けば天下の良将となったであろう。僅か 29 歳で没したのが惜まれる。西郷側に属して倒れた者が必ず能力が高かったとはいえないが、後の薩摩人が蓄財を念とし、ほとんど守銭奴となったのに反し、彼には財を軽んじ子孫のために美田を買わずという気風があった。戦乱がいつ発生するかわからず、太平の世が望みがたいため、蓄財に走るのかもしれないが、戦死するまで財に執着せず、国事のために奔走することこそ

必要な条件である。長州人は薩摩人より財に執着しなかった。そのため政治界で薩摩人を圧倒できたのである。西郷側の薩摩人は軍事上、政治上に飛躍する素質を備えていたので明治 10 年までは模範的な人物として認められていた。至る所で首領に推され、自らを空しくして人を容れ、ひとたび了解すれば死も避けずという有様であった。群議をまとめるに適し、一時は薩摩人の声色が全国に流行したほどであった。その薩摩人の中で最も優秀な者が、この戦役で消滅したことは、国家にとって大きな損失であった。西郷が乱に与(くみ)すると聞いた

## 木戸孝允

は、調整に乗り出そうとしたが、周囲に止められて断念した。木戸は西郷と文武の性格を異にしつつも、維新創業には互いに勲功があった。しかしその後の失意の状態はやや似ていた。西郷は征韓論において大久保と木戸に合わず、木戸は内政に関して大久保と合わなかった。いずれも大久保に不満を持っていたのである。西郷は志とは違って一世を驚かす内乱をあえて起こして倒れたが、木戸はこれに先立って病が篤く、公事、私事に悩んでいた。そして「西郷、もうたいていにしないか。」と言いながら 44 才で没した。薩の西郷、大久保に対し長に木戸があり、共に英傑でありながら、その木戸が老いずしてすでに振るわなかったのは不審であった。木戸の大器ぶりは貧弱な伊藤の比ではなかった。しかし事実において伊藤の勢力が木戸を上回ったのは、木戸が変事に適し、伊藤が平治に適していたからであろう。あるいは木戸は過労の余り神経衰弱に陥ったものか。岩倉大使の副使として、大久保らとともに欧米視察に出発した頃より、往年の桂小五郎とは異なった姿を見せ始めていた。杞憂に過ぎないことに思い悩むこと多く、小事に惑い、なすべきことをなさず、元君の立場から伊藤一派を非難するなど、多少精神に異常をきたしていたのではないか。もし精神の健康を保持していれば立憲政治の好首相としてとなっていたであろうが、健康に問題があれば余命はあっても政治生命は終わりである。明治 10 年に木戸、次いで西郷が没し、11 年に

## 大久保利通

が刺客の手に倒れ、維新の三傑は相ついで世を去った。維新の創業については、西郷にもっとも力があり、木戸がこれに次いだ。ただし新政府が設立されたのちは、大久保が政治の中心となり、百官が彼に従った。西郷と木戸は、おのれの力を信じつつ、地位に執着せず、進退もやや気まぐれな感があった。大久保はおれが位につかなくて政府はどうなるかという自信があった。彼は強いて官禄を求めず、国家多難なおり一日も俺を欠くことは出来ない信じ、いかなる難局にあっても、それを克服しながら地位を揺るがぬものにした。好んで策を献ずる者は、このような人物に依存しなければ、目的を達することが出来ない。木戸に付いていた伊藤が大久保に従い、木戸の怒りを買ったのも、そのためであった。木戸は人の言を聞いてもそれを実行しようとはせず、

大久保は容易に人の言を聞かなかった代わり、ひとたび聞けば必ずそれを実行した。知識と智略があっても実行力のない者は、他人に頼って功を求めようとするが、大久保は自ら求めずに

### 事実上の首相

となった。もし遭難せずに生き長らえていたなら、いよいよ重きを加え、後に山県が大御所になったよりもなお大きな存在になったであろう。ただ大久保が長命を保ちえたかといえば、そうも断定できない。帝国議会が発足した時、ある人が勝海舟に尋ねた。「西郷が今生きていたら、議会制は出来ていただろうか。」海舟は「もちろん。」と答えた。次いで「大久保が存命していたらどうか。」「おそらく出来ていないだろう。」これは勝の臆断に過ぎないが、大久保は立憲政治には賛成していたとしても、「府県会があれば十分だ。帝国議会はそこで経験を積んでからで良い。早くても明治 30 年でよい。」と考えていたようだ。自由民権論者が各地に起り、国会期成同盟が運動を盛んに行ったのを、軍隊や警察を使って威圧し、不穏な状態が幾年か続いた。23 年に国会開設と決めた後も、兇器を持って反抗するものが続出した。さらに開設を遅らせば、官憲を振るって革命的な騒ぎがなお続いたかもしれない。その時大久保はいかなる脅迫にも屈せず、自分の考えを貫徹するだろうが、それが果たして国家のためになったか疑わしい。48 歳で没したのは早すぎたかもしれないが、遅過ぎるよりも、彼の名誉は保たれたであろう。彼の事業は明治政府の動揺を防ぎ、強固な状態にして後継者に渡すことになった。彼が生存していたら、大隈の辞職は起きず、改進黨が成立しなかったかもしれないが、それが良い結果を生んだとも思われない。一年足らずの間に三傑がいなくなり、後進たちの寄り合い所帯となった。三傑にとっても後進たちにとっても好都合であった。ついでに触れておきたいのは、大久保が没した翌年に

### 川路利良

が没したことである。西郷側の薩派が決起した時大久保と川路は西郷を訊問するという口実を使って、彼を暗殺しようとした。川路は大久保と並べて言うほどの人物ではないが、大久保の信奉者であり、互いに頼むところがあったに相違ない。川路は奇異な病気にかかりついに起てなくなったのは何かの因縁があったのであろう。翌 13 年には官軍第一の勇将

### 野津鎮雄

が 44 歳で没した。彼もまた因縁談につながる。野津と大山は総司令官としてどちらが優るか、決めにくい。しかし西南の役にとっては、大山がいなくても、山県がいなくても、野津は必要な人物であった。智略において山田の方が優ったが、私学校生と接戦し最終的に撃破したことは、官軍の力を轟かせた。これは野津の腕前であって、「死ね、

死ね！」と連呼し、振り向いて、「近衛兵を殺し、俺も死ぬぞ！」と叫んだ。この勇将の死によって西南の役の幕は閉じたのである。明治 16 年には

### 岩倉具視

が没し、太政大臣を贈られた。時に 59 歳。岩倉は大久保に次ぐ政府の中心人物であった。公卿の地位が高かった当時では、大久保より力を発揮した面もあった。大久保の没後は政治の中心となり、伊藤が憲法制定に従事したのも岩倉の意向による。もし長く生存すれば、明治 18 年の官制大改革の時、最初の総理大臣になったかもしれない。三条太政大臣を内閣の外に移すとき、自分も閣外に出たかもしれないが、首相は薩の黒田か長の伊藤かという場合、岩倉の首相に誰も異議をはさむまい。早く死んで太政大臣を贈られるのと、内閣総理大臣となって平民と肩を並べるのと、国民にとってどちらに利益があっただろうか。

岩倉が没した時

### 三条実美

は 47 歳。あと 7 年を経て没した。明治に入って三条といえば太政大臣、太政大臣といえば三条。大織冠の位を経た者でないとこんな力は振えないほどの感があった。しかし官制改革の際、「総理大臣は陛下の意向に沿い、大局に明達し、事務に精通する人物を、選ばなければならない。内外多端の折、私がこれに堪えるところではない。」と辞表を出した。こうして太政大臣職はやむなく廃止された。明治 22 年、黒田首相が条約改正に失敗して辞職した。そのあと三条がしばらく首相をつとめたが、やむを得ず推されたとはいえ、悪く言えば周囲にもてあそばれた感がある。岩倉が没した頃に三条も死んでおれば、官制改革によって伊藤が総理大臣になることで、公卿政治は消滅したといえるが、なお公卿政治は衰えながらも続いたのである。明治 21 年、

### 三島通庸

が 54 歳で没し、翌 22 年には森有礼が 44 歳で亡くなった。三島は土木県令の名があり、土木問題で大いに世間を騒がせ、河野広中は彼によって獄に投じられた。その後土木局長、警視総監となり、保安条例を強力に適用し、威力をもって反対者を押さえた。保安条例は疑似クーデターであり、こうまでしなくても鎮圧できたとは、後で知られたことである。川路が大警視となった後、警視総監は特別の技能を要するものとみなされ、三島に至って頂点に達した。あまりに警察権を振り、却(かえ)って風声に驚くという醜態を演じたので、総監に余り重きを置くのは誤りだと知られるようになった。事なかれ主義も悪いが、事を好むのも良くない。三島は単純なことを望まず、事に乗じて財を成すという反西郷側の人物であった。青山墓地にある不相応な墓は、名誉なのか不名誉なのか。



## 森有礼

は青年時代から頭角を現わし、文部大臣になる前には外交官の経歴があった。文相の任についてからは、種々の画策をして人の眼をみはらせた。歴代の文相中第一とされている。帝国大学、高等師範などの名称は彼の時に始まった。22年に横死しなければ、さらに見るべき事業をなしとげたであろう。しかし彼は剣難の相があったと言われるように、どこか穏やかでないところがあった。文相として最も適任であったかどうかは疑わしい。好んで事を起すのは良いが、それを好む割に、眼識の欠けたところがあった。今日学制問題に困難を感じているが、ことごとく彼に責任を負わすことはできないにしても、多少の責任はある。彼は自由主義と官僚主義の極端から極端に動き、しばしば自己矛盾を示した。人物を抜擢(ぼってき)する勇氣はあったが、その人物が好成績をあげたかといえば、必ずしもそうではない。彼はいずれ他の職に転任したであろうが、もしそのまま文相にとどまっていたなら、利の弊を見たかもしれない。何職が適任であったかは言い難く、あるいは意外な功を立てたかもしれない。文相職にあつて横死したことは、のちに模範的文相と見られて得をしたのではないか。明治 25 年

## 山田顕義

が没した。器(うつわ)はそんなに大きくなかったが、生まれつきの才能は同僚をしのぎ、用兵の術は他に及ぶ者がなかった。西南の役では旅団長として活躍し、多くの兵を従えて、まるで師団長のように見えた。自ら才を頼むあまり、ややもすれば長所を捨てて短所につき、西南の役では「大軍を動かす必要はない」と広言した。「太平の時の軍事にあわてるのは、山県や大山のことだ」といい、自分は別の活動をしようと、組織の見直し、法典の整備に力を注いだ。しかしその事業はたいして進展せず終わった。彼はナポレオンを好んでいたのも、当時の兵制が一変してドイツのモルトケ指揮に移りつつあるのに意を用いず、川上や桂らがドイツより帰って軍事を担当するのを傍観した。一朝事あれば自ら大軍を率いて動こうと考えていたのである。この大勢を早く察知し、参謀本部に閉じ籠れば、川上よりも力を発揮したことであろう。そうでなくても、もう 3、4 年存命していれば、日清戦役に何らかの戦史を飾ったかもしれない。彼は命が短かったために真価以下にしか認められなかった。明治 28 年に

## 井上 毅

が没した。今なお森と並んで二大文相と称せられている。しかし二人は文相として閣内に勢力があったというだけで、文相としての実績はない。森も井上も長く文相職にとどまり、教育に貢献したことは否定できないが、学制についての見識を備え、彼らのように勢力を持っていれば好成績をあげたであろう人物は他に大勢いた。29 年に没した

## 陸奥宗光

は、波乱に満ちた生活を送り、54歳で終わったことから察すれば、十分に才能を発揮できなかったのではないかと思われる。彼は大局を見ず、大策を立てなかったのも、大事は託せなかった。しかし臨機応変の妙に秀で、死地に陥っても生き延びるといふ芸当を演じた。「西郷が戦乱に勝つ、井上が条約改正に成功する、李鴻章はあえて開戦しないだろう。」など大きな誤りをしながら、功によって伯爵となった。あと10年生きておれば侯爵となっていたであろう。翌30年に亡くなった

## 後藤象二郎

は、陸奥の規模を大きくし、才覚を鈍にしたものといえる。陸奥と同じく応変派であり、一そう大芝居を打てる人物であった。彼が15代将軍に大政奉還を勧告したときの堂々とした態度は、真に一世の人物と思われた。しかし征韓論破裂後に政界を去って、小事にこだわり、鉱山経営に苦しんで元老院議長となり、鉱山法を改正して窮地を脱するなど、官と私を往復して自らの利益を図った。政党運動が衰え民心が離れると、藩閥政府に対し大同団結を訴え、一世を風靡(ふうび)した。明治年間のもっとも華々しい政治運動であった。彼ならでは企てえないところであった。もし大同団結の途中で死ねば、西郷を文明的にした者と認められたであろう。板垣が岐阜に死んで自由の神と讃えられたように。後藤は「死を決してことにあたる」といった。天下はそういう人物を渴望した。割り引いても、もう少し政府に肉薄してもらいたかったと思う。しかし一通信相となって藩閥政府に入り、意外に腹のない男であることを自白した。ただ閣内にあつては内閣が動揺するたびに首相の位置を狙って動いたのは、抱負が大きかったことを示す。彼以外、大隈を除き、誰が薩長出身でない者が首相になろうとしたか。さすがに後藤は平大臣の椅子に座りながら首相となって飛躍する時を狙っていたのである。薩長がこれを許さないのは明白なのに、無造作に薩長のうえに出ようとしたのは、うぬぼれであった。土佐第一の政治家後藤が没して、ほどなく土佐第一の軍人

## 山地元治

が没した。彼は早くから名将として聞こえ、まるで父親のように士卒の心をとらえた。軍人がいよいよ技術的となり、あたかも鉄道技師のようになって、精神的に人を啓発する人物が少なくなる中で、彼は独眼流の存在であった。意気をもって人と対するので、兵卒は感激して涙を流し、水火も辞せず働く。山地の部隊は必ず敵を粉砕すると信じられていた。ただ士気を高揚させるだけでなく、広く世道に影響を与えた。技術家としての軍人も必要だが、精神家としての軍人も必要であり、今は残念ながらそれがない。山地を第一の闘将とすれば、

## 川上操六

は第一の謀将であった。維新とともに兵制は一変し、西南の役には敵味方共に新式

の戦術を用いた。それはしかし独仏戦争以前の遺物であり、それ以後の軍事進歩に順応し、大軍の運用に腕を振るったのは、川上であった。彼はモルトケのような技術家ではなく、それほどの能力はなかったが、ドイツの真髓をおおよそ得ていた。支那と戦う時は牛刀をもって鶏を割く感があったが、川上にはロシアとの戦争に力を振るってもらいたかった。それ以前にこの世を去ってしまったのはまことに残念であった。日清戦争で日本兵が連戦連勝すると、

## 勝海舟

は当局者に、「もし支那兵が自国に退却したら、日本はどうするか」と聞いた。当局者は答えに困った。勝は悲観論者だからこういったのだ。勝は大勢を判断し幕府は維持できないと察した。新たに中心人物になるのは誰かと見定めた結果、西郷を得て深く交わりを結んだ。西郷の顧問になろうとして海軍卿になったが、意のようにならず、西郷が戦死してからは政界に無縁となってしまった。自ら意を屈して迎えられるのもいさぎよくないと考え、政府とは不即不離の態度を取りつつ隠居放言をして、川上よりわずか先に世を離れた。その9年後に没した

## 榎本武揚

に比べると、勝は一段と知恵があった。勝は壮年に壮年らしくし、老年に老年らしくし、底のない智者として知られた。一方榎本は海軍に、外務に、農商務に遍歴しながら至る所で疎外され、五稜郭の総帥がこのような境遇かと嘆息された。彼が五稜郭で戦死していた場合と、その後30年かけて栄達したのと、どちらが彼にとって益があったか。朝廷に従うならそれも良し、徳川氏のために戦うならそれも良い。しかしいったん兵を挙げながら、勢い窮して降伏するとは武士の恥である。この点で、明治21年に死んだ

## 山岡鉄舟

は、勝と先見の明が同じであった。しかし経路はまったく別で、剣に秀いで、禅に秀いで、剣と禅に秀いで、彼に及ぶものはなかった。鉄舟死んでまた鉄舟なし。勝の死んだ明治32年には

## 大木喬任（たかとう）

という薩長以外の一雄を失った。明治年間、官界遊泳術にたけた者が多かつた中で、遊泳せず地位を高めたのは見事であった。薩長は彼を妨げなかったが、彼自身も薩長に妨げられることを望まなかった。薩長が手を触れようとするれば、よくこれを防ぎ、乗ずる隙を与えなかった。枢密院の議長となったのも、薩長のお恵みによってなったのではなく、自分の力量でかち得たのである。法相として、文相として、自信を持って事に当り、世を救済する意図を持っていたが、独裁専制の色が強く、次官以下はただ

命令を聞くだけであった。事業は中絶したものも多く、晩年はややつまづいた感がある。抱負および才能は大きかったが、伝える実績は少ない。

33年に没した

## 黒田清隆

の末路は振るわず、評価は真価以下に落ちた。もし首相職を伊藤に譲り、シベリアに漫遊し、その途中で没するか、または22年に首相となって早く病死すれば、西郷以後の英傑と称せられたかもしれない。不得手のことに能力を試され、新知識を欠き、新時代に適しないとされ、墓の中の遺骨のように扱われたのは気の毒であった。彼は胆力があってしかも細心、勇敢で親切、もし頭脳の健康を損なわなければ、英雄の風があるとて、伊藤山県より人心を得たかもしれない。樺山資紀は黄海の戦果により内務大臣となった。もし彼が病没すれば、黒田以上の人物として西郷の後継者とみなされただろうが、二人は共に安楽に長生きする幸福を得たので、評価が下がるのは当然であろう。34年6月

## 星 亨

が東京市役所で刺殺された。林董伯爵は「明治年間、自分の責務を重く受け止め、勇気を持って事に当った。大久保の後には星一人しかいなかった。」と述べた。ある点では当たっている。林が彼の何を認めたかは不明だが、大久保も一旦決意すれば往々手段を択ばず、人情に忍びないことをあえてやった。星は民間にあって、官力を使えなかったので、金銭を悪用して物議をかました。しかし晩年は考えて、善に帰ろうとしたようにも察せられる。もし途中で慎むことを知り、10年20年の長命を得れば、政友会を統率して、内閣組織の大命を受けたかもしれない。彼は変死のため、失うところが多かった。同年2月

## 福沢諭吉

が没した。福沢は府会議員として出て、福地が議長、自分は副議長となった。だが僅か一言、弁当の催促をし、ほどなく辞職して世間の笑いを招いた。そのため福地より下に見られたが、当時病没していれば、慶應義塾における功績は福地に勝ったので、彼の評価は福地を上回ったであろう。田中が文部太輔の時、福沢を大書記官として官界に入れようという議論があった。福沢は断ったがそれほど人気は高かったのである。しかも68歳で死んだときは、他に類例のない唯一無二の地位を占め、他の追随を許さなかった。福地とは段違いであった。これは福沢の真価が変わったのではない。はじめ中村正直、尺振八らが私学校を設けたがほどなく消滅し、慶應だけが隆々と残った。義塾の成功は福沢の評価を挙げたが、彼の授業は小幡に及ばず、経営もほかに人があったのである。福沢の真価は何人にも屈しない不屈の精神が、義塾の内外に大きな

刺激を与えた点にある。「瘦我慢説」により、勝、榎本に辞職を勧告したのも、その精神から出た。論理の末をもって批判すべき人物ではない。学力においては、同年12月に没した

### 中江篤介

の方が上であった。同じく私塾を設け、新聞を起し、一時の勢力は目覚ましかった。しかし処世術は福沢に劣り、また才能に自信を持つ余りその発現に欠陥を表わした。旧漢学者の癖を受けて邪路に陥った。異常な能力を持ちながら教養を積んだが、その使い方が悪く、ルソーの宣伝者として終わった。福沢と並び称せられる

### 新島 襄

は、福沢の10年後に生まれ、11年前に没した。長命すればどういふ人物になったか。人物として甲乙はなかったが、すでに生きる道を決めており、果たして大いに発展したかどうか。同志社がしばしば不振に陥ったのは、基金に関係ある外国人との交渉により生じたもので、新島の信用で財政上の危機を救ったとするのは疑いの余地もある。寿命を得たならば、さらに事業の拡張を見ると同時に、今日の評価と違った評価が生まれたかもしれない。35年7月に没した

### 西郷従道

は、器の大きさと隆盛の実弟であることを証明した。明治年間の諸大臣で、彼のように包容力のあった人物はいない。彼は必要となればいかなる役職も辞せず、陸軍は可、海軍は可、文部も農商務も、外交官も可。ただ首相になるのは避けた。首相職が嫉妬の焦点であることを知り、自ら首相は不適任と宣言したところは、官にあつて官を超越していた。人と争わず、悩まず、官位を高め、あと4、5年生きていれば必ず公爵になったであろう。一種独特の妙を備え、もし西南の役に兄を救援していれば、情理兼ね備わり、ほとんど完全の域に達するのだが、そこまでは性格が整っていなかった。政党に多少私財を投ずる勇氣はあつたが、何の場合にも一身を投げ出さず、成功を察して進み、失敗を察して避けた。兄より知力はあるが、兄ほど人心をつかむ力はなかった。西南の役で薩摩の豪傑が少なくなり、知識や才能は優れていても、規模は縮小し往年の面影を残すのは、黒田と彼のみとなった。同年8月

### 西村茂樹

が没した。彼の性格は西郷と長短補うものであった。一は豪壮、一は謹厳。一は文盲を持っており、一は常に学んだ。良い面での正反対であった。世に倫理運動は少くないが、西村の弘道会のように普及し、永続しているものはない。今ではそれほど盛んではないが、現に徳川達孝伯爵が会長となり、徳川頼倫が副会長となりつつある。貴

族的すぎるにせよ、基礎が出来ており、倫理運動が比較的成功的なものは、西村の性格に基づく。明治 36 年に

### 田村怡与治（いよじ）

が 50 歳で没した。彼は死んで安んずることができなかつたであろう。ロシアとの戦争を苦心惨胆して計画した。しかし開戦の一年前に没したので、児玉が飛び入りして才を伸ばした。日露互いに輸送力を誤算し、実戦に臨んであわてたのは、田村が生きておれば防げたかもしれない。短命で幸な者もあるが彼の場合はもっとも不幸な例であった。同年に没した

### 片岡健吉

は、土佐の政治家が多く失敗した中であって、始めと終りがきっちりあった人物である。取り立てて功績はないが、政治家には珍しい宗教家的性格を備え、普通の牧師よりも牧師らしかった。しかし黙々の間に疑わしい行動があったのは、郷土の気風を反映したものであろう。

37 年の 1 月と翌年の 1 月に、大陸経営に志のあった

### 近衛篤磨と副島種臣

が前後して没した。二人の死は日露戦役に君国を加護する形となった。近衛は首相級に属する唯一の新人物であった。当時はまだ首相になるにはもう少しの経歴が必要と思われていたが、確かに政界の一つの中心となり、年一年輪郭を大きくして行く勢いがあった。もし存命していれば、清浦内閣流産後、大隈内閣よりも近衛内閣が出来ていたかもしれない。生きていれば本年 55 歳。この人を見ないのは残念である。人に担がれるということは危険もあるから、普通は避けるものだ。しかし彼は担がれて平然としていた。小者にも担がれていたのは、まさに首領として生まれてきたからといえる。副島は彼より 22 歳の年長、二人は共に対外的国論の指導に当たった。副島は兄の枝吉（神陽）に及ばないといわれていたが、国を支える資質を備え、詩書においても一家をなしていた。不思議なことには、この二人に近づく人々が、相次いで死んだことで、

### 高橋健三・神鞭知常・陸 羯南

など、政党以外に運動の場を広げつつ墓に入ってしまった。その後 10～18 年を経て、国土組は姿を消してしまった。この三人は互いに性格を異にしたが、小さな心配は捨て、大きな心配を事とする点で一致していた。

38 年に没した

### 鳥尾小弥太

は早熟なのか、早老なのか、30歳前に中將となり、機略縦横な性格で人にはばかられていた。40歳の頃に現役を去り、一不平將軍となった。宗教界に飛躍を企て、禪において山岡鉄舟と並び立った。鉄舟は胆で勝ち、得庵(小弥太)は歳で勝つといわれた。得庵は文を作り、碁を囲み、努めずに常人より秀でたので、天禀の才があったのは確かである。伊藤をはじめ多くの洋行者がオーストリアのスタインを推奨したのに対し、得庵は彼を訪問して奇問奇答を發し、逆に彼らから推奨されることになった。この後に見るべきことがないのは奇である。要するに能力を集中することを忘れ、万能あって一心足りずであった。

同年に没した

### 田口卯吉

が経済雑誌を發行したのは、25歳の時であった。その後は論文の寄稿はもちろん、出版業者として、府會議員として、衆議院議員として活躍した。しかし晩年は力の分散を不利益と感じ、もっぱら著述に力を注いだ。51歳で逝ったが、後10年も生きれば評価がさらに上がったかもしれない。彼は尋常以上に事業を成功させたが、業半ばにして没したといえる。39年には

### 福地源一郎

が66歳で没した。彼の事業より見れば、長きに失したともいえる。東京府会において福地が議長、福沢が副議長となり、福地の評判はいよいよ高まった。池之端の御前として、政府の伊藤、井上、実業界の渋沢、益田と肩を並べ、自らを一代の才子と自認していた。しかし一代の才子はその頃より下り坂となり、得意の新聞社説は荒れ始め、大学生に代筆させるようになった。経理に難もあり、他の事情もあって小説、脚本に転じ、余技として才能を見せた。しかし文芸として見るべきものはなく、やまと新聞に掲載した論文も力がなく、哀れな末路を示した。政界で木戸の信用を得たように、劇界で團十郎の信用を得て作劇をした。生前に生命があったと同時に死後に生命を失った。彼は有り余る才を抱きつつ、人によって事をなそうとした。それにより利益を博し、また損失を招いたのである。

同年

### 児玉源太郎

が55歳で没した。絶頂期に近づきながら、それに達せず終わった。彼は早くから才能を發揮し、進路を順調にたどり、退くことがなかった。後になるほど進境著しく、台湾で成績を上げ、帰って内地で重職につき、ロシアとの戦では主導者となり、参謀総長として活躍した。戦後は大経営に従事したいと考え、首相に転じようという勢いがあった。首相としての成績は見る由もないが、評価の高い桂太郎をしのご成績を挙げえたので

はないかと思われる。翌41年

### 野津道貫

が没したのは、児玉と好対照であった。児玉は軍人的政治家、野津は生粋の軍人的軍人であった。軍司令官の多くは児玉の先輩であり、野津も児玉を子供扱いにして、総司令部の命令を聞かず、自分の信ずるように行動して迷うことがなかった。野津にはその力量があり、新しい知識は欠いたとしても、たぐいまれな天性と豊富な経験により、直感的に判断して危ない所がなかった。退却すべきところを踏みとどまり、あるいは進撃して勝を制した。闘将として、兄の静雄とともに明治戦史を飾った。もし財にこだわらなかつたら文字どおりの名将であった。フランスのマッセナほどではなかつたにせよ、この一事は彼の欠陥であった。これは西南の役以後の薩摩人の通弊であり、さらにひどい人物もあった。

同年

### 児島惟謙（いけん）

が没した。ロシア皇太子遭難事件とともに忘れられない人である。当時の政府のあわてようは、帝国の恥であり、今日より見ても背に汗する思いである。大審院が法を曲げなかつたのは、せめてものことであった。児島の発意ではなかつたにせよ、院長が彼でなかつたら、法は曲げられていただろう。42年

### 伊藤博文

がハルピンで暗殺された。政治家として死に所を得たといわれる。西南の役の後、長閥が薩閥を圧倒し、長閥の伊藤が政治、山県が軍事を代表した。政治に関しては伊藤の権威が不動のものとなった。しかし二大戦役を経ると軍事がとみに優勢となり、山県の力が政治方面にも及ぶようになった。山県は往々伊藤に食い下がったが、伊藤は山県ほど地位に執着せず、ややもすれば現職から離れて別の発展を試みようとした。あたかも西郷が大久保に対して取った態度に似ている。大久保が当初西郷の力を抑えようとしたように、山県は伊藤の政治的才能を低め、伊藤の上に出ようとした。あえて伊藤との衝突を避けなかつた。局面を打開するには伊藤の方が優れていたが、慣例により秩序を維持する力は、執着力の強い山県の方が勝っていた。山県が官僚から祭り上げられるのに反比例して伊藤の失意は強まった。伊藤は個人的には山県を抑制できたが、官僚が自分を離れ山県に向かうのをどうすることも出来なかつた。最初の首相、最初の枢相、最初の貴族院議長、最初の韓国統監が晩年をいかに送るかが一つの課題となった時に、突然変死の報が来た。伊藤に対する悪評はこれによって一掃され、真価と評価は一致した。むしろ評価の方が高まり、神に似た扱いとなった。43年、

### 井上 勝



が没した。鉄道に功績のあった彼は、東京駅の前の銅像を見て、察することができる。しかしそれを狭軌鉄道の記念とすれば、名誉よりも恥辱である。井上ばかりを責めるべきではないが、今になって広軌に改めようと苦心しているのは誰の責任か。44年

## 谷 干城

が没した。西南の役の直後に死ぬか、伊藤内閣の農相として洋行し時代の弊風を痛惜したときに死ぬか、三年間貴族院に列し強い論陣を張ったときに死んでいけば今日のような評価にはならなかったであろう。後藤伯爵は、「谷は常に湊川に死ぬのを望んでいた。」と語った。湊川で死ねなかったのは、彼のために不幸であった。同年

## 小村寿太郎

が没した。翌々年に林董が没したのと相まって、外交舞台から二人の名優を失ったことになる。かつて二人はとても勅任官にはなれないだろうと噂されていた。だが晩年になってとんとん拍子に昇進し、小村は10年の間に無爵から侯爵に登った。平時の外交官としては駐英大使で失敗したが、外交方針を定め、これを貫徹する能力は他に及ぶ者がいなかった。彼は他の外交官と違って、民間の外交思想に注意し、しばしば民間人と意見を交換した。病苦を提げて国家の大事に当たるところは、陸奥と似ていたが、意志においては陸奥よりはるかに強かった。負担が重くなるのに従い、ますます満身国家と一体化していった。死の床で、「意見は誰の説によって定めても良い。ただいったん決めた以上は身をもって責任を果たさなければならない。」といった。彼は言行一致により大きな責任を果たしたのである。

## 林 董（ただす）

は日英同盟の締結および日露戦争の進行に当り、小村とは長短を補いながら国事に尽した。林は自ら方針を定めるよりも、定められた方針を実行するのに長じていた。彼は「私は薩長の先輩に関係が多く、小村の地位にいても、彼のように出来ない。小村は先輩と関係が薄いので自由に手腕を揮(ふる)える。」と言っていた。しかし対外大使としては、老練な人物であった。この二人は偶然にも提携して外交上晴れの舞台で活躍したのだが、その最中の明治45年に明治天皇が崩御された。天皇は神聖にして侵すべからずだから、みだりに評価を加えてはならない。ただ不世出の英主、少なくとも桓武天皇以後の名主であった。大葬の当日に自刃した

## 乃木希典

は、この英主の殉死者として最もふさわしい人物であった。乃木が台湾総督として生を終えたら、世人は何も記憶しなかつただろう。と云って、乃木以外の誰が自刃しても乃木のように認められなかつたであろう。乃木の性格、経歴と自刃は合わさって人心を

ゆすり、何百という乃木会が発足したのである。美名の下には醜いものが存在するから、乃木会の創立者にはいかがわしい者がいる。しかしそういった人物を感奮させたのも乃木の広い徳であった。大正2年

### 田中正造

が没した。一谷中村を引っ提げて天下の問題とし、幾度も帝国議会で波乱を起こしたこの人物は、ただものではない。佐倉宗吾にもまさる。しかし死後は忘れられたようになったのは、73歳という寿命を全うしたからである。もし貧民のために奮闘し非業の死を遂げていたら、貴族における乃木に対し、貧民における田中として、祭られたであろう。政府には危険人物視され、刑事に尾行されたが、生来は温厚で、暴力を好まず、平穏な手段で解決しようとしたので、却って人心に訴える力が弱かった。直訴した時は死を決心したものの、死を決して死なず、結局一人の山師と見られ、世評は真価より低くなってしまった。同年

### 桂 太郎

が没し、維新以来最も昇進の早かった政治的成功者が、意外な末路の哀れを示した。桂は山本内閣時代にヨーロッパへ旅行した時に死んでいれば、伊藤に劣らない同情を集めたであろう。伊藤よりもうまく事を処理し、失敗が少なく成功が多かっただけ、智略の計り知れない偉人と見られていた。彼は第1次内閣で成功し、第2次内閣で失敗、第3次内閣で大いに失敗して、どんな愚者も演じない愚を演じた。その結果真価以上に暴騰した評価は、真価以下に暴落した。高山を背負った虎が傷を負った猫のようになってしまった。死んだときは68歳、なお余力があったにしても、失敗を回復することができたかどうか、覚束ない。彼は寿のために辱を得た人ではなかろうか。同年

### 徳川慶喜

が没し、時代は徳川時代と永遠に断絶した。慶喜は將軍職を廃するために將軍職に就いたので、必ずしも後藤の勧告を聞いて、大政奉還を悟ったのではない。水戸烈公の子として、これが自然の順序であった。幕府の維持を図ったのは、他から余儀なくされたからに過ぎない。兵を率いて鳥羽、伏見の両道から進んだのは、薩長の怠慢を怒ったからであるが、情においては理解できるものの、忍耐すべきところではあった。戦うならば必勝の準備をすべきで、戦わないとすればあくまで平穏な態度を取るべきであった。判断に迷い、大兵をもって進み、銃砲の声を聞いて直ちに敗退したのは、大失敗であった。しかもその後恭順の意を表し、誰の勧誘にも応ぜず、小栗の強い要請をも退けて、即座に彼を罷免したことは、慶喜に強固な意志と大勢を見る明があったことを示す。時に年齢は32歳。將軍として名君の資質があった。しかしその後の45年間、彼は何をしたか。執権者として大政を奉還した以上、小職にかかわるのを恥と思ひ世

間と交渉を絶ったのであろうが、今少し有益な働きをしてほしかった。世は長足の進歩を遂げているのに、空しく謡曲の類で時を過ごすとは、物足らない。当時会桑の賊と呼ばれた会津の松平容保は 34 歳、桑名の松平定敬は 23 歳、いずれもその後、見るべきものがない。彼らを賊とし朝敵として大兵を差し向けたのは、今となれば滑稽なことであった。明治史において第一の賊は徳川慶喜、第二は西郷隆盛。しかしともに賊心がなかったとして、前者は生前に公爵、後者は死後侯爵を授けられた。称号にこだわると、時として事理を誤まる。大正 3 年

### 伊東祐亨（すけゆき）

が没した。日清戦争における伊東は、日露戦争における東郷と同じ位置にあった。しかし東郷が名声をほしいままにしているのに、伊東はほとんど忘れられている。彼は初め予備役に入れられていたが、たまたま開戦となって大任に当り、様々な功を立てることができた。樺山が軍令部長として彼の名声を後押しした。伊東は世評では東郷に及ばないけれど、先進者の間では大きな勢力があった。薩摩人には順序にこだわるところがあるけれども、伊東が力を持っていたのはそれだけの能力を持っていたからである。能があるようでもあり、ないようでもありながら、同僚間に重きを占めた人物に、同年に没した

### 松田正久

がいる。年齢は 70 であったから、さらに長命すれば首相になったかもしれない。寺内に次いで誰が首相になるか、西園寺に交渉して辞退されたとき、原が貫禄に乏しいとして、比較的敵の少ない松田が推されたかもしれない。彼は長命を得たが、なお将来があった。大正 4 年

### 井上 馨

が没した。長州の三尊中まず伊藤が没し、次いで井上が姿を消した。長州が勢力を得て、閥族といえば長閥に限るという一般の見方であったが、中でもこの三人が際立っていた。伊東と山県はお互いに相容れず、ままたま反発し合ったが、二人の間を調停して事なきを得たのは、井上であった。彼の性格は矛盾していて、時に潔癖、時に濁った。善を行う一方、悪も行い、善より見れば涙もろい好々爺、悪より見ればむさぼり激しく、飽くことを知らない、人を人とも思わない残忍非道な人物であった。大胆な面があると思えば、臆して口を閉ざす。もし井上が伊藤より先に死ねば、伊東と山県の間はいっそう陰悪となり、それだけ政界に変化を与えたであろう。

大正 5 年

### 大山巖と高島鞞之助

が没した。終命の時二人の地位には大きな差があった。大山は公爵で元帥、高島は子爵で予備中将、優劣は大きい、もともとこんな差はなかった。むしろ高島の方が鈍物大山より飛躍するのではないかと思われていた。西南の役に大山は少将、高島は大佐として出征した。高島は計画上手で戦役中に少将に昇進した。戦後は第4師団長となり、京阪の重鎮と目された。西郷の後継者はこの人と、声望が高かった。しかし陸軍相に就任するとともに政界に力を伸ばそうとして、陸相としての実績に見るべきものがなかった。山本が首相にならなければ地位を維持したであろうが、山本に圧倒され、周囲の期待を裏切った。大山は特別な能力はなかったが、自分を知っていた。常に適所に止まることを心掛け、地位が高まればそれに応じて修養し、新しい軍事知識を養った。詳しくは知らなくてもおおよそを理解し、それを人に誇らなかつた。高島は絶えず何かを求め、才能を頼って修養を欠き、陸相となってから20余年間何の進境もなく、ただ軽輩たちの雄にとどまった。それさえ資力に困って、貧して鈍したと噂された。金銭に淡泊なのか、利益を挙げようとして損をしたのか。いずれにしても蓄財をしなかつたのは、西南の役後の薩摩人には珍しい存在であった。西郷に私淑しようとしたのであろうが、豪傑の質がありながら落沈したのは惜しかった。

同年加藤が没し、翌年菊池が没した。ともに帝国大学に関係があるが、その関係からいえば、明治17年に69歳で没した

### 古賀謹一郎

を忘れてはならない。彼は古賀精里の孫、古賀洞庵の子、儒者として成長し、早くから目を外国に注いだ。蕃書調所を起し、その長となった。加藤、外山、菊池などはみな調所の益を受けた。明治3年、55歳、まだ老いてはいなかつたが、朝廷の招きに断じて応じず、そのまま老を迎えた。才識と経験を持ちながら、空しく老を養うのを褒めるわけではないが、幕府に仕え、開港を唱えた身としては、討幕攘夷の徒が組織する政府に加わるのを認めるわけにはいかなかつたであろう。骨の固い尊重すべき人物であった。

### 加藤弘之

は、慶喜が大阪より逃げ帰った時、幕府にあつてしきりに議に加わつていた。福沢は「おのおの思ふとおりになされよ。」と言って去つてしまい、上野の砲声にも耳を傾けなかつた。加藤はその後も幕府に仕えたが、福沢は仕えず、逆に勝と榎本に辞職を勧告した。人物の相違はその辺で分る。識見において二人は確かに距離がある。しかし加藤は学問が深く、懸命に勉強していた。ブルンチュリー著の『国法汎論』の翻訳は、何礼之のモンテスキュー著『万法精理』と同じく、国法の研究に大いに役立った。バックルが流行した時、これによって日本開化史を著わそうとし、ついでダーウインの進化論が盛んになると、前の著作を絶版にして『人権新説』を著し、天賦人権説を否定した。

ただ「天賦」を否定しながら、しきりに「天則」を言うのは奇妙であった。明治 10 年に大学総理となり、19 年まで在職した。森有礼は、加藤に大学を任せるといいながら、加藤を元老院に回し、後任に渡辺洪基を任命した。加藤はこれに不快を感じて、政府の処置を非難した。しかし渡辺が総長職を去ると、加藤は復職し、3 年後に病気のため辞職した。渡辺に代って復職したことはおかしくもないが、幾年も経たずに辞めるくらいなら、最初から辞退する方がよいではないか。しかし学問に忠実で、老いても勉強を続けたのは偉い。加藤に次いで浜尾が総長となり、ついで彼が文相になると

### 外山正一

が文科学長から総長に転じた。彼はかつて加藤の民選議院尚早説に反対し、自由民権に同情していた。しかし後には少し遠ざかって、教授として進化論を紹介し、学長として初めて哲学、政治、経済を併合し、のち政治、経済を法科に移し、史学、文学の設置に同意した。文科の性質について定見を欠いたといえる。総長になっては最高教育の責任を感じ、文相となつては教育刷新の大任を果たそうとしたが、いずれの職も長続きしなかった。常に一個人として、各地を巡り、盛んに演説をし、彼本来の能弁をもって新生面を開こうとしたが、壮健な身体を持ちながら 53 歳で没した。真の性格および能力は未知数であった。外山が総長より文相に転じたとき、

### 菊池大麓（だいろく）

が学長より総長となった。名門の出で幼い時から学才があり、早くから留学して 24 歳で大学教授となった。理科の第一先進者として世に聞こえた。しかし学才がありながら研究よりも、教授に力を入れたので、研究面では 10 年前に没した北尾次郎にかなり劣った。しかも総長となり、文相となり、枢密顧問官となり、理化学研究所長となり、行くところすべてにおいて学才ある事務家として名を馳せた。男爵を授けられたのは、第一次桂内閣で日英同盟に関与したからである。辻、浜尾らが教育上の功で爵を受けたことからいえば子爵が相当と思われる。そうならなかったのは、学者肌が抜けきらなかったからであろう。類似の才能として菊池とほぼ同時に没したのは、

### 奥田義人

である。菊池ほど学才はなかったが、常識学問である行政や法律の理解力はあった。そして事務の能力に長じ、事務の必要などころにはどこにも行けた。自分から何をしようかなどとは思わず、与えられた地位について、事務を完全にやり遂げた。もし文相または法相になれば、官界遊泳術の模範となったであろう。東京市長となった時には、着々と事務をこなし、名市長と呼ばれた。4 年前に奥田と同年齢で没した

### 鶴原定吉

は、大阪市長として、奥田と同様に名を挙げた。融通の利く点では奥田に譲ったが、それだけ権門勢家に媚（こび）ることなく、見たところに似ず大丈夫の意気を備えていた。政友会の中で、後日の蔵相と見られていた。しかし自己の入閣を第一に考えず、政党を柱にして事を実現しようとした。途中で難病にかかり、官吏出身者でありながら大阪の事業家となる機会があったが、実現せずに終わった。6年8月に没した

## 土井通夫

は官吏から実業家になった部類の先輩である。明治 15 年に控訴裁判所の判事を辞めて、鴻池家に入ったのは、2 日前に没した高倉藤平がまだ 9 歳で時であった。以後実業界で力を注ぎ、東京の渋沢と並び称される活躍をした。81 歳での死は、44 歳で死んだ高倉ほど将来に期待できなかったが、有数の元老として特殊な存在であった。秩序立った社会では、元老が重要な地位を占めて当然だが、元老といえ

## 山県有朋対大隈重信

の関係が、興味深く注目される。山県の性格は大山と反対だったが、処世術については、大山の上を行って。特別の技能はなかったが順次勢力を増して最高位を極めた。人目を引くような事業はなかったにもかかわらず年を経るにしたがって栄達し、長寿を得てますます権力を振るった。大隈はもし大正 3 年に内閣を引受けてから病没するか、あるいは大浦の失敗を引受けて内閣改造をしてから病没すれば、大政治家として後世に伝わったであろう。名物大隈がいかに自らを処するか、注目の的であった。せめてできる限り保養し、長寿して、明治大正年間にこのような大人物が存在したという姿を見せてほしかった。すでに維新後半世紀を過ぎているのに、なお当時の人物が横綱のように存在していたのだが、ここで一つの時代が終わりをつげ、これからは新たな人物が新たな舞台を開くであろう。

維新後 50 年の間には、実業界に、学术界に、芸術界にそれ相応の人物がいた。これらの人物は一般の民心と直接関係がないので、ここでは取り上げなかった。この半世紀の間に、日本でただ多くの人物を生んだばかりでなく、世界は

## 多くの著名な人物

を送り出した。18 世紀の末から 19 世紀の初めにかけて、フランスにはナポレオン、タレーラン、イギリスにピット、ウェリントン、ネルソン、アメリカにワシントン、アダムス、ジェファソンなど、いずれも輝かしい人材であった。しかしこの 50 年間にはそれ以上の人物を輩出している。ナポレオンのような傑出した人物は出なかったにしても能力においてその前の時代に比べ遥かに優れた人物が生まれている。ドイツにビスマルク、モルトケあり、一人は政治に、一人は軍事に傑出している。フランスには若くして死んだガンベッタが飛躍した。彼が長寿を得ればどこまで到達したか。その後フランスには優れた

人物が出ないようだが、フランスは絶えず堅実な進歩を続け、一たび開戦となるや百年前にも劣らない力を出す。守勢を取って攻撃に出ないのは、人口が少なく兵が足りないからであって、もしドイツより兵が多ければベルリン城下での和平となったであろう。イギリスにはデイスレー、グラッドストーンが相次いで出た後、これに次ぐ人物なしと見えたが、ソールズベリー、バルフォア、チェンバレン、カメル・バンナーマン、アスター、ロイド・ジョージなど皆大任を果たしている。イタリアのガリバルディー、マッジーニ、カウヴェール、ロシアのゴルチャコフ、スコベレフらはみなこの半世紀の人である。その後ここまで有名でなくても、ロシアのウイツェなどは一時全ヨーロッパの注目を集めた。アメリカにはワシントン以後の人物であるリンカーンが亡き後、グラント、ブレーン、ルーズベルト、ウイルソンなどみな前より豊富な人材がそろっている。

イギリスもドイツもロシアも君主は三代目で、それぞれ出来事が多い。イギリスの二代目エドワード 7 世は、皇太子時代に評判が悪かったにもかかわらず、皇帝として独特の妙を発揮し、談笑の間にドイツを孤立化する端緒を開いた。ロシアでは初代が虚無党員の爆弾で倒れ、三代目が革命により監禁されつつある。ドイツでは三代目がしばしば事を試みながら中止し、平和方針を取ると思いきや、56 歳で多年の準備を一挙に爆発させ、世界を砲煙の中に巻き込んだ。三年を過ぎて、いまだ解決の道はついていない。この戦乱の規模は、ナポレオン戦争の比ではない。文明の進歩に比例して、戦禍は規模を拡大している。個人の偉大な力が発揮できない今の実状は、各種の機関が整備されているからである。しかし巨大な機関を運転するのは人間であるから、人間が機関運営能力を高めなければならない。

## 個性の発現

は時代に左右される。秩序が重んじられる時代には個性が没却され、秩序を破る必要があるときは、個性が明確に表われる。現在の世界戦争は多年の準備の後に発生し、人よりも機関を重んじるから、個性を露出する者が少ない。しかし戦後に旧秩序を改造する時、個性が強く現われることがある。ロシアにケレンスキーが出たのはその例である。人名が伝わると否とにかかわらず、今後は必ず有能な人材が現れるであろう。ただ変化が進むときは波乱を免れない。織田、豊臣の時代には豪傑が続出した。しかし徳川時代になると豪傑は出なくなり、人物はほとんど儒者に限られた。維新後の半世紀には、徳川時代に比べれば傑出した人物が多く出た。

しかし人物の真価は一朝一夕に判断できるものではない。まだ真価の定まらない人物も多く、それにはなお多くの時を待たねばなるまい。世間が語るのは評価であり、評価には幸不幸、運不運がつきまとう。坪10 銭の土地が築港の結果百円となるように、自らの真価には何の変化もないのに、評価がむやみに高くなることもある。識者はその乱高下に惑わず、慎重に真価を求めなければならない。